

随 想

紆余曲折 —再編・統合の調印までの足跡—

前学長
高 久 晃

富山医科薬科大学は、平成17年10月1日で創立30周年を迎える。そしてその日に富山医科薬科大学は発展的に解消し、新富山大学の医学部・薬学部・和漢医薬学総合研究所、それに附属病院として杉谷キャンパスを形づくることになる。このような奇しき一致で感慨深くさせられたのは私ばかりではないと思う。

平成10年4月1日、私が富山医科薬科大学学長を拝命したころは、全国の国立大学は大学改革の真只中であつた。自己点検に自己評価・さらに第三者の外部評価と点検・評価の連続でもあり、執行部、部局長、評議員はもとより、職員の多くが研究の暇もない程に改革に没頭せざるを得なかつたと感じている。「改革ダンスに踊りくれる国立大」等の揶揄じみた記事が月刊雑誌に見られたのもそのころであつた。

その総決算として大学審議会より「21世紀の大学像と今後の改革方策について」の答申が平成10年10月26日に提出された。その提言の内容について今さら記するのは避けるが、まさに大学改革のバイブルでもあり、その提言に呼応して、本学でも平成12年11月に本学の長期構想・中期計画をまとめ「21世紀の富山医科薬科大学像—個性輝く大学を目指して—」を本田副学長の尽力の下に策定した。

平成13年6月、国立大学学長会議で文部科学大臣よりいわゆる遠山プランが提示され、国立大学の法人化、国立大学の再編・統合、そしていわゆるトップ30への大型予算の投入が提示され、出席していた学長たちに大きな衝撃を与えた。

富山県は人口110万人の小県ではあるが、国立大学は短期大学を含め3校を擁する。構造改革の名の下に大学の再編・統合がすすめられようとしているとき、本県の3大学がその埒外にいることは許されない状況であつた。

富山大・小澤、高岡短大・鑑山、富山医薬大・高久の三学長が再編・統合について最初に話し合ったのは、平成13年8月上旬であつた。その結果、紆余曲折はあろうが、再編・統合に向けた話し合いを始めることを文部科学省の高等教育局長に報告している。

以後三大学の接触が始まったが、その途中富山大の小沢学長が辞任する事態が生じた。

東西医薬学の融合というブランドでその存在、特色が認められてきた本学にとって再編・統合はメリットがあるのか？本学内部でその議論は沸騰した。入試判定ミスの隠蔽に象徴される富山大学の体質、高岡短大の短期大学としての各種問題も浮上し、協議開始の学内合意は得られなかった。

平成13年10月富山大学に瀧澤新学長が誕生し、平成14年3月改めて三学長が再編・統合についての協議開始の合意書に調印し、その後は新大学構想協議会の場で協議を続行したが、再編・統合の合意に至らず平成15年度の統合は困難となった。物事に例えて恐縮だが私はそのころ“この三大学の再編・統合は大・中・小の材質の異なる大きさの違う3種類の車輪を使ってスムーズに動く車を作る位に困難なものである”と感じていた。規模が同等の二大学の再編は比較的容易だろう。また大きな大学と小さな大学は吸収という形でこれまた可能であろう。二大学が三大学となると問題点が幾何級数的に増加するのを実感した。

高岡短大の提案になる準学士制度、学群構想にも異論・反論多く、“何でも良い、単なるホチキスで各学部を束ねる統合も止むを得ない”との意見もあったがこれでは理念に乏しく発展も期待出来ない。一方教養教育の組織—そのあり方をめぐっては大綱化が既に終了した大学との意見の相違は避け難く、また少子化社会へ向けての対応にも彼我の差は歴然としており、デッド・ロックの状態が続いた。その間、高等教育局の審議官が2度に亘り、富山を訪れ懇談したりしてその熱の入れ方は尋常ではない。また、県の有識者懇談会からの提言を受けるなど、地域ぐるみでの関心の強さを示していた。平成15年に入っても、なお膠着状態は続き、平成16年度の統合も断念せざるを得なかった。

本学にとっては、外部資金獲得の実績、新大学移行によって東西医薬学の融合という医薬大ブランドが埋没しないか？教養教育組織、トップ30-COEを目指せる大学院改革等々解決すべき諸問題があった。しかし一方では地域社会からの統合への要望も重視しなければならない立場にあった。

平成15年3月中旬にいたり、このような三大学再編・統合の膠着状態と危機的状态を開くため、三学長だけで会談することになり、富山医科薬科大学学長室でその話し合いが行われた。高岡短大鑑山学長は2年程前から進行性の肺線維症にかかり、その時はかなり病状は進んでおり、常時酸素吸入装置を携帯せざるを得ない状態であった。大きな酸素ボンベを学長室に運びこみ、鑑山学長の呼吸困難に対処した。3回に亘り10数時間の会談であったが、高岡短期大学の組織・定員をどのような形で新大学の中に取り込むか？が最

後の問題であったと記憶している。主に人文系、芸術系学部の再編でもあったので、瀧澤・鑑山両学長の意見を私が調整する形で話し合いは進んだ。その結果、各大学へ持ち帰るいくつかの検討事項や合意内容文書の詰めは残すものの大凡の点で三学長は再編・統合の合意に達することが出来た。そして各大学それぞれで機関決定の後、平成15年5月8日、再編・統合の調印となったのである。しかしこの調印式に鑑山学長は出席できず、病床でのサインとなった。

本学学長室で会談したとき、三学長が共にもっていた危機感を今でも改めて実感できるし、また酸素マスクを抱えた鑑山学長の姿は、今も尚私の臉から離れない。

三大学の再編・統合問題が生じて以来、三大学の学長は最初の3人からすっかり様変わりした。また新富山大学では新たな執行体制の下で、国立大学法人の激動を乗り切ろうとしている。“年々歳々 花相似たり、歳々年々人同じからず”の感が強い。

再編・統合の成果は10年後に明らかとなるぐらい息の長いものであろう。

開学30年、営々と築き上げて来た特色ある富山医科薬科大学は今、新富山大学の中でその特色をさらに伸ばそうとしている。新大学のもつ知的・物的資源、スケールメリットをフルに活用してさらにさらに発展する事を望んでいる。

富山医科薬科大学の整備・充実期

元学長

佐々木 博

筆者が初めて専任の管理職となったのは昭和63年9月から平成6年3月末までの医療担当副学長兼病院長であった。当時の学長は山崎高應先生で、富山大学時代には薬学部長を、医薬大学時代には教育・研究担当副学長を経験しておられた。従って文部省（現文部科学省）の内情に詳しく、病院長時代に今度東京へ行くから一緒に来ないかと屢声をかけられた。

文部省は5階まであり、事務次官、審議官、経理課等の人たちを紹介されたが、何といても重要なのは医学教育課であった。ここでは医学部、薬学部、病院、後には看護学科の問題、特に概算要求が取り扱われていた。それぞれの部門に課長、課長補佐、係長、病院関係は病院指導室長が居られ、山崎先生は旧知で、これらの人たちを紹介していただいた。2～3回は山崎先生のおともをしようかだったが、その後は特に用件がなくても上京の際には必ず医学教育課に立ち寄ることになっていた。重要な点は何げない話の中から文部省の短・中期的な展望を聞きとることが出来、こればかりは実地に体験してみないと分からないことであった。

山崎先生の学長時代には遺伝子実験施設の概算要求が通ったが、この施設は最初富山大学に置くという事であったところ、山崎先生が政治力を発揮されて本学に設置される事になった。

話は元にもどるが、本学は昭和50年10月に開学し、初代平松学長（故人）、二代目の佐々学長時代の2年間は正に“新設期”であり、全ての新設医科大学にほぼ平等な講座、部門が設置され、本学では昭和57年に第一期生が卒業し、昭和61年に大学院博士課程の第一期生が修了して初めて博士号が出された頃であった。

山崎先生が2期6年の学長を務められた後、平成6年4月から4年間筆者が第4代学長職についた。病院長時代をも通じて主な概算要求により設置されたのは輸血部、ICU、医療情報部、高度先進医療部（内視鏡部）、放射線基礎医学講座の新設、看護学科修士課程の設置等であった。全てに筆者が直接関わったわけではなく、特に看護学科の設置につい

ては当時医学部長の片山喬教授が、修士課程の設置については辻陽雄教授らが努力された。

筆者にとって印象的だったのは一つは医療情報部の概算要求であった。当時本学では林先生が努力されて、熊谷病院長時代に院内措置として設置されていた。しかしPR不足もあって学外にその存在は殆んど知られていなかった。丁度医学教育課の課長補佐が金沢大学を視察される目的があり、ついでに本学に立ち寄られた。林先生は大層熱心な方で、毎年医療情報部の活動を冊子にまとめられていたので、予め相談して、約30分、本学の状況を課長補佐に話したところ、大層感心され、翌年の概算要求に通り、林先生は教授に就任され、長年の苦勞が報いられた。

もう1件は高度先進医療（内視鏡部）である。新設医科大学では筑波大学にまず概算要求が通ったが、この大学には内視鏡学会の理事長の崎田教授がおられ、当然の事と思われた。ところが翌年金沢大学に設置が決まった。しかし同大学附属病院には内視鏡の専門家はおらず、癌研外科には内視鏡北陸地方会支部長を務められた磨伊教授がおられたが、所詮、病院とは無関係であった。少々頭にきた筆者は、早速病院指導室長に会い、本学には北陸No1の田中三千雄君（現看護学科教授）がいるのに無視するとは何事かと質問したところ、翌年には概算要求が通った。さらにやり手の施設課長が、ICU、輸血部、医療情報部の中央診療棟の予算を獲得し、輸血部の後に光学医療診療部が移転し、従来の数倍の面積になり、積極的に活動出来るようになった。

山崎学長及び筆者が学長時代は、“新設時代”を脱却して、それぞれの大学が自らの特徴を伸ばす“整備・充実期”に相当し、この10年間にかなりの実績を残して来たように思う。筆者の大学同期の福井医科大学のS学長が、“なぜ富山ばかりに概算要求が通るのか？”と羨しがられた。

ところで筆者は平成10年3月末に退官したが、その前年から国立大学の“独立行政法人化（独法化）”が初めて取りあげられ、文部省、国大協（国立大学長会議）ともに猛烈に反対したが、その後の経過は皆様ご存知の通りで、さらに統合問題が起こり、高久学長、小野学長のご苦勞は大変だったと推測する次第である。

しかし来年からは薬学部は6年制になり、医・薬横断の大学院構想が可能になると考えられ、また統合後は医・薬・理・工による生命科学センター構想も浮上して来るものと思われる。本年10月から発足する富山大学は、正に“発展期”に該当するものと思われ、OBは大いに期待している次第である。

富山医科薬科大学開学30周年に憶う

元学長

山 崎 高 應

さる8月27日、本学創設30年の記念式典が行われ、ノーベル物理学者江崎博士の、大変示唆に富んだ講演を拝聴し深い感銘をうけた。そのあと恒例によって祝賀パーティーが開かれ2、3の方の祝辞があり、不肖私にもご指名があった。予め電話による了解をすっかり忘れていたので、残念ながらお祝の言葉をご容赦願った次第である。

最近私は物忘れが多く、自分の居間で何かものを整理して見ればばかりなのに、それが其処にないということが屢々あって、パニックになる。それでこれからは物の整理には、少し大きい籠を用意しその中に全部一緒くたに1か月分程放り込んで、必要なとき籠をひっくり返して探せば絶対に無くならない筈である。下手に整理箱を何個か用意して、それぞれに分類して入れておけばよいと思っても、それぞれがどの整理箱に入っているか、入れた途端に忘れていたのである。そうは思いながらも矢張りこれまでの習慣で、幾つかの抽斗や箱、特に本の間等にいれると100パーセント無くなってしまい、数か月後にヒョロヒョロと出てくる。誠に腹立たしいことである。悪い癖で、前置きが長くなったが、人前で喋るときもこうなのである。

さて私は今八十路を超えて、30周年という言葉を聞くと、私には2つの30周年がある。言うまでもなく富山薬専を含めた富山大学30年と昭和50年以降の本学30年、なんと合わせて還暦である。昭和20年8月6日、賀茂海軍衛生学校の校庭で原爆の閃光を見てから3週間後富山に帰って、恩師菅沢教授にお便りをしたところ、今学校へ来てもガスも水道も出ないので、仕事も出来ないからこなくても良いとのことで、嗚呼これは良かったと思ったのである。実は私たちは高校2年半、月足らずで大学に入り、同20年9月まる3年で卒業すれば晴れて徴兵制度で軍人になる予定だったが、偶々私たち一部が大学での軍事教練をサボッタばかりに退学寸前の処分を受けそうになったので、モタモタしていて陸軍に引っ張られたら大変だと、海軍の短現を受けて同20年4月初め新設の賀茂海軍衛生学校へ勤労働員の名目で行ったので身分は軍籍になかった。

そんなわけで大学も行かずに家の商売の手伝いを、当時戦前アメリカに生まれてアメリ

カで育ちながら戦前日本に帰り少年航空兵として戦争に出て帰ってきた親類の者らと一緒にした。その頃は私は戦争に敗れて学士様でもあるまいと思っていたのである。しかしこれもそのうちに飽きが来て、もともと40年も前から働いていた竹内さんという人に一切を任せることにして、ひとまず卒業証書をもらいに行ったら、先生は早速、「おい、山崎君、今は家が東京にある人は良いが、そうでなかったら学校に残って実験は出来ない、どうだ横田君に紹介状を書くから行ってみないか、あそこは学校が焼けて無く、簡単には建たないよ。そうすればそれを理由にまた何処へでも行ける。金沢薬専の鶴飼君の所もよいがあそこは焼けていないから出にくい」そんなことで3年次後期の授業料と引き換えに卒業証書を受け、同21年2月中旬の金曜日、横田先生を訪問した。横田先生は「来週月曜日から来給え」とのこと、後でわかったのであるが、実は翌日土曜日には富山電気ビルで富山薬専復興期成同盟会が既に発足の予定なので、月曜日になったのである。実はこれが私の還暦の始まりである。余白が少なくなった。残念ながら富山大学でのことは割愛願いたい。以下は本学創設に関わることについて思い起こしてみたい。

富山県に医科大学を設置しようとの話は昭和30年代吉田知事のころからあった話であるが、容易には実現しそうもなかった。なんと言っても莫大な資金を必要としたからであろう。日本海医科歯科大学、県立医科大学などの名称が出たり引っ込んだりしていたような記憶がある。

一方富山大学では修士課程の大学院さえなく、同31年やっと専攻課程が薬学部を設置され、引続き同38年新制国立大学のトップを切って修士課程と和漢薬研究施設とが同時設置されるとともに、工学部の生産機械工学科が開設され大学は喜びに沸いた。ところが同40年代に入り、経済学部経営学科を増設する動きがあり、翌41年9月概算要求が大蔵段階まで持ち上げられた時点で、そのための人事問題で燻りがおこり始め、飛ぶ鳥を落とす勢いといわれた人を中心に、昭和43年秋大紛争が起こった。このため我々の失った物は計り知れない物があった。名状し難い空しさと腹立たしさ、此処まで荒廃した大学が何時の日か生氣を取り戻せるのかと挫折感にうち沈む日々だった。しかし紛争も凡そ2年余で一応の静けさを取り戻し、工学部の五福地区統合について再び強く要望されたところ、またぞろ医大設置が県や医師会方面から要望があがるようになった。47年秋ころ富山県が一転して医学部設置の要望を富山大当局にもたらした。当時評議会で医学部設置に異存はないが、このために工学部の五福集中が遅れぬよう配慮されたいとの要望があり、医学部設置を全会一致で了承した。そして同48年3月末ころには医学部設置概算要求書が出来上がった。

ところが4月に入ってから、大学側と県側との話し合いが（この話し合いは大浦教授と木村教授にお願いしてあった）かみ合わない点があったらしいが、決裂しない前に一方的に県側は医学部構想を転換し単科医大で進めたい。ついては富山大学で作成した概算要求書を参考のために供与されたいとのことでこれを譲渡した。当時、森芳松局長は「一体県は何を考えているのかね。国立大学を創るのであれば本学以外に準備するところがないのにな」と慨嘆していた。しかし私どもは和漢研究所創設と、永らく懸案の経営学科増設、薬学部環境衛生分析講座増設に力を注げるということで、寧ろ安堵した。昭和48年12月30日（日）この3件が大蔵内示された時の喜びは一樣では無かった。ホテルニュージャパンで簡単に祝杯をあげたが局長は五勺も飲まぬ中にぐらぐらになって喜んでいる姿が今も眼前に浮かんでくる。翌31日朝まだき、降りしきる雪の中、富山駅に横田嘉右衛門、櫻井謙之介の両先生が迎えにまでおいで下さったことは、今もって忘れがたい。

一方医科大の方はこの時調査費が計上された。これは創設準備費の前段階のものである。これでいよいよ49年度に入るわけであるが、医科大学については、県および医師会で単科の医科大学設置準備会が着々事を進めるどころか、教員の選考さえほぼ骨格が出来上がっていることが、巷間で取り沙汰されていた。丁度そのころ上記準備会の席上今は故人の富山県医師会長田上康さんが、富山大学ともっと連携を強化して、和漢薬研究所も出来たし思い切って林新学長にかけあい、薬学部、研究所を切り離しこれに医学部を加えた三者統合による近代医療高度化の理念のもと新しい大学を創設できぬかとの提案がなされたことを、しらゆり会長の中井精一氏から伺った。林学長もおそらく中田知事あたりから聞き及んでいたと思われる。そんな話があってから数日後5月20日前後、中田知事から初めて直接電話があり県庁へ呼び出しがあって、初対面ながらいきなり、医科薬科大学構想の推進は考えられないかとの質問に驚いたのであるが、この時私は、研究所を創った前後に、奥野文部大臣との話の中で、奥野先生から富山は医科大学を創りたいと聞いている。しかし、そもそも大学紛争は多くの場合、医学部から起こっているが富山では経済学部からである。いずれにしても紛争を起こしてはなあ、それに富山の場合はすでに、福井、大分、鳥根、香川、佐賀、高知、山梨、宮崎等先に手を挙げているから難しいよ、と言われていた話を話した。もっともこのとき奥野先生は、国立で薬学部のあるところは皆医学部が設置されている。富山だけが医学部が無いのも珍しいなあ、でも何か新しい発想でもないか難しいよと言われていたことも知事に申し上げた。しかしこれはこれだけの話では終わらないと思ったので、ことの始終を大浦研究所長、木村評議員等に話し教授会の重要議題として採り上

げて貰い、一方学外の重要関係者、富山大元学長横田先生、薬窓会長石黒七三第一薬品工業社長、しらゆり会長東亜薬品常務中井精一氏、元富山薬専教授金岡又左右衛門氏、櫻井元教授らと短期間中数次にわたって会合を重ね協議し、意見を頂戴した結果、思い切って、地域医療の近代高度化と東西医薬学統合の理念のもと、決心したらと賛意を表された。しかし、我が国薬学教育にとっては、消長苦難の長い歴史があっただけに、まさに本学薬学の命運に関わる重大事、清水の舞台から飛び降りる気持ちであった。

他方文部省との話では事務局を通し、教授会の意向が固まりかけたころから、林学長の指示を受けて、安岡局長が衝に当たった。一方私は新設医薬大の概算要求以前の段階で文部大臣に数回にわたって会っていただき、特に博士講座の設置を絶対条件として医薬統合の大学とすることを申し入れご理解を願った。この間にも何度かの評議会も持たれ、一部の評議員の反対もあったが多くの評議員の賛成も得られていた。これは昭和49年6月から7月に懸けての段階である。このころ井内局長から清水官房長に対し、富山医薬大を創設した場合、薬学に博士講座を設置することについて検討するように指示がなされている。考えてみれば博士講座となると、全国の国立大学に波及する大問題になることは必至であった。それで薬学は理学、工学などと異なり医学教育課の所掌になっている。また和漢研をも包含した全国初の総合医学教育機関という特殊のケースで、医学部同様薬学にも和漢研を含め博士講座設置の配慮をすべきとの事のようにであった。そして必ずしも医学部の学年進行を待たなくても良い、との共通理解がえられたのは、概算要求締め切り直前の同年7月中旬である。これをひっさげて24日に、横田、中井、金岡、大浦の4氏と会合し、25日教授会に諮り、7月27日、31日と最終評議会で全会一致で承認された。概算要求書は少々遅れても良いとのことであったので、約1月遅れの8月27日（火）だった。この提出時の岩間次官の喜びは大変で9月早々に富山大学に来学され富山を和漢医薬学のメッカにしたいと言った。9月中旬になって創設準備委員会が持たれ、林学長ほか、平松金沢大学、小林新潟大学と私山崎が準備委員、大浦教授が準備室付として加わって、基本構想の策定に掛かった。

いよいよ私たちには、医科薬科大学造りの本番が始まったのである。準備室の事務方も我々と一緒に上京、文部省に日参し、文部省から指示のあった点を踏まえて、構想の練りなおしが十数回に及んだ。

一方、概算要求の経過状況を知るため関係部局に出かけ、10月も初旬様子を探ると、当時の予算班の横山恒雄主査（故人）は大変親切な人で、環境衛生分析学講座や和漢研を創

るときも教職員の定員等にも多大の配慮をしてくれた人であったが、今度は2医科大の創設費を要求してあるが、政治力が働くと2校分の予算で3大学になるかも知れぬ。しかし大分は島根の次だなどと婉曲な言い方で、富山が第一で通過することを教えてくれた。これで創設は大丈夫と喜んだ。その横山さんへ、私が去る平成13年3月京都のご自宅にちょっとした私用で電話したときは全く元気だったのに、その2、3か月後ジョギングの途中鴨川の辺で急死され愕然とした。本当に私には忘れ得ぬ人である。

話を元に戻そう。昭和50年12月には三木内閣が誕生し、永井道雄氏が文部大臣となった。金沢の人で、林学長も喜んだし、私にとっても旧制武蔵高校の1年先輩で知り合っていたので、好都合なことが多かったが、年内の予算内示は見送られた。1月に入ると医薬大創設が見送られそうな空気が新聞紙上に伝えられたが、杞憂であった。

1月11日（土）大蔵内示あり、富山と島根医科大学が同50年10月1日開学、51年4月学生導入ということに決まった。本学の場合富山医科薬科大学の名称はこの時正式に決定したのである。というのはそれまでは、富山県に設置される医学教育機関創設準備委員会というのが正式名称で、初代学長平松先生は準備室長事務取扱であった（他の大学の場合は事務取扱という言葉は付いていなかった）。文部省としては最後まで、富山大学医学部構想があり得るとの期待が無かったというわけではない。これは後日私が文部関係の人に質したときに、確認したことである。大蔵内示と同時に学長および副学長（一つは医療担当副学長兼病院長、一つは医学系から学長が選出された場合薬学部から教育研究兼並びに厚生補導担当）の選考を始めるようにとの事だった。

医学部教員は必ず公募のこと。一般教育は公募でなくてもよい。山崎さんの方で適宜選考されたい。学科目は本省と協議するとのことで、2月5日文部省国立学校控室で富山大林学長、平松、小林、山崎と文部省斎藤医学教育課長との5者によって決定された。

医学部講座数30、全体の3分の1を超えて一大学の教授が占めてはならないことも、了解された。公募を始めるとかねて噂に上がっていた候補者が多く応募された。偶然金沢および新潟からそれぞれ10講座が提供された。あとは札幌医大、東北大、東大、岐阜大、阪大、千葉大、広島大などからだった。先生の資格審査は昭和50年8月初旬で、全員合格した。そして50年10月平松学長の下で、戦後国力の回復にふさわしく、すべての国民が均しく享受できる医療福祉体制整備の一環として一県一医大という国の構想と医薬統合の理念のもと、ここに本学が船出した。この時における県当局の富山医科薬科大学協力会の設立資金面での真摯な応援は、他大学の協力費の比ではなかった。

校舎の建設も間もなく実施されたが、第一回生の授業は旧富山中部高校校舎を借用した。2年目から全面的に杉谷の現在地となった。第二代佐々学長までは既定路線に従って、年次計画が実施されたが、この中で特筆されるのは昭和53年学年進行を待たずに薬学部の博士講座の前期、後期課程の同時発足であった。そしてこれは全国国立新制大学の重大関心事となり、やがて全国立大学に博士講座が設置されるきっかけとなった。もう一つ佐々学長時代に特筆すべきは国際交流の推進で、凡そ1億円の基金集めで不肖私もお手伝いをした。これがまた県内他大学にも刺激となった。

ところで、佐々学長の後昭和63年、瓢箪から駒がでるように不肖私が三代目学長を拝命することとなった。将に青天の霹靂である。4月には新事務局長が赴任した。元文部省医学教育課病院指導室長をしていたので知っていたが、これで医学部も完成年度を過ぎてから既に6年を経過しているので、卒業生の地域病院への派遣と、特に医学部拡充整備に力を注ぐことに協力を求めた。その結果臨床検査学、放射線基礎医学、和漢診療学の3講座が、そして平成5年には全国医科系大学のトップを切って、看護学科が設置された。このときの事務局長押田氏も、元予算班主査、病院指導室長経験者で特によく知り合っていた。平成3年7月13日（土）正午ころ押田局長は平成4年の概算要求に医学教育課に行っていた。上記放射線基礎医学のためであった。ところがこのとき、富山に平成5年に看護学科を設置するかという話が押田局長から電話でもたらされたのである。私は直ちに受けよと電話で答えた。これについては既に、昭和63年私が学長になった直後に、広瀬友二富山県医師会長が来学され、医療の近代化と高度化に伴い、医師、薬剤師だけではなくこれらと対等に仕事の出来る看護師が絶対に必要であるので、看護学科の設置を是非やってほしいと強く要望され、片山医学部長に十分に伝えてあったので、医学部教授会ではいつでも対応できる体制はとってあった。その矢先の話であったので、佐々木副学長、片山学部長が先頭に立って設置に向けて立ち上がった。

ところで看護学科については、新設医大ではそれぞれの地方では看護師の需要については十分対応できるので、設置しないという、暗々裏の了解が一方でなされていたのである。従って私どもにとっては、ある意味では寝耳に水だったのである。しかしこの時は佐賀医大、山形大医学部では地理的条件の悪さから看護師の充足に難渋していたので、文部省も重い腰をあげついでに押田事務局長のいる富山もやるかということになったものである。全くの幸運で平成5年全国のトップを切って発足しその後各大学の短期看護学科が4年制になった。私の在任中もう一つ出来たのは施設の充実なども行われた。学部で講座増をす

るのは非常に困難であり、薬学部の一講座増もあったが、これは学長として私自身、事前協議の時躊躇しながら、心ならずも文部省に要求した。しかし、それはその後の薬学部飛躍発展のためには、必ずしも為にならなかった。これは当時の事務局長配慮不十分の結果で、反対した文部省に対する無理強いだっただけで、そしてこれが後々まで影響し全国の国立薬学部の後塵を拝することになったのである。修士講座、博士講座、いずれも全国トップ、研究所も唯一、学生数も最多、講座数も最多で隆盛を誇りながら、いささか残念である。しかし、これは他大学薬学部が旧制医科大附属薬学専門学校という歴史的背景の然らしめるものと言えばそれまでの話ではある。もう一つ私が学長就任直後すべきことは、医学部出身若手医師の地域病院への出向であった。時間のかかる仕事であったが、これは先生方の精力的な尽力もあって今報いられているのではないだろうか。

終わりにになりましたが、私の2度に亘る30周年、まさに光陰矢のごとし、奇しくも本学が創設された昭和50年10月1日からまさしく宿命的とも思える30年後の来る10月1日新富山大学が発足することとなる。昭和24年新制大学が、新憲法のもと民主主義と教育の機会の均等の理念を掲げ、国民的祝福を受けて発足した。そして駅弁大学と言われながらも、一般教育と専門教育の上に人間形成と言うか、全人教育を目指して今日に至ったが、その間戦後の復興に多大の貢献を果たしてきた。唯この度は僅か二十余りの大学統合に過ぎず、その理念はと言うと、将に異口同音に、地域貢献、教養教育の充実（数年前に廃止したことを忘れて）、学際研究への期待感をとメリットを挙げている。私には何を今更と空しさを禁じ得ない。理念なき統合の旗振りと揶揄する向き、小異を捨て理念を掲げよとも言われた。本学の場合も教養教育の充実、学際領域の研究に貢献できると言うようなメリットを掲げるだけでは、あるいは経済効率を求めるのでは何の理念も哲学もない。財政諮問会議からのトップダウンによる、初めに統合ありきの感が否めない。しかし今更こんなことを言っても始まらない。みんなで渡れば怖くないという護送船団的発想を捨てて、今こそ八学部の総合によって新しく掲げられた理念のもと新機軸を打ち出し、予想される様々の矛盾や困難を超克してより高い立場に止揚されることを心から念願して、私の30周年随想の記とする。

医薬大での思い出

元学長
佐々 学

私は昭和57年（1982）4月、思いがけずも富山医薬大の学長に就任することになり、都会の生活から一転して地方に住むことになった。富山に移り住んでまず感じたことは、残雪を抱いた立山連峰の威容に圧倒され、自然環境に恵まれた県であることを実感した。それにも増してうれしかったことは、私のような「旅人」に職員並びに多くの県民が親切であり、県内を流れる豊富な清流から育まれた酒と米がなんともおいしいこと。

環境庁が選んだ日本名水百選に本県が最高の4ヵ所も指定を受けている所以が納得された。医薬大からの帰り自噴する名水を汲み宿舎でウイスキーの水割りに感激したことを昨日のごとく思い出している。富山に来る前は琉球大学の客員教授として那覇に滞在していたが、異常渇水で3日に1度しか水が出ない生活を余儀なくされていたのでなおさら感じた。だが、間もなく学長を引き受けたことを後悔することになった。大学に赴任して驚いたことには、学長には研究室もなく研究助手もいないことだった。学長室は大変立派でバレーボール位できそうな大きさだった。行政職だから研究は遠慮してほしいとも聞いた。これでは東京から研究資材満載で運転してきたことが無駄になってしまう。

そこで先輩の富山大学の柳田友道学長に助言をいただき、学長室の一隅に仕切りを作ってくれないかと希望をだしたところ願いがかない、間もなく小さな研究室が完成した。しかし、医科薬科大学の学長が、ユスリカの研究をしていいものか疑問視された。ところが公害研究所所長時代取り組んできた東京都を貫通する多摩川のユスリカ調査が一段落してまとめてみると、最上流から下流までに何と60種以上のユスリカが棲んでおり、しかも水質により種類の棲み分けがはっきりしていた。すなわちユスリカはそれぞれの種類が水の汚染度の指標に役立っていることが分かった。それにユスリカによる気管支ぜんそくなどのアレルギー病が発生していることも注目され始め、医薬大でもユスリカの研究に市民権が得られ、学長職の傍ら研究を続けられたことは望外の喜びであった。また最初の教授会で禁煙を提案したら即決で了解された。さすが医学系だと感心した。この禁煙の件では後に国際大学で提案したら即座に反対されかつ周囲で喫煙される嫌がらせを受け、医学系と

文科系との違いをまざまざと見せつけられた。

学長在職中、宮中講書始の儀にて昭和天皇の前でご進講をしたことで、多くの県民が知ることとなり、上京時機内で面識のない人たちから挨拶を受けることが多くなった。

富山で生活して印象が深かったことは、みんな大変教育に熱心で、科学や文化を尊重し、よそから来た学者や学生たちを温かく迎えてくれることだった。しかも、富山は田舎だというようなコンプレックスがなく、例えば農家の人たちも、難しい科学のことは理解できないが、あんな方学者先生も米の作り方を知るまい、といった対等の気持ちで接してくれるのが何よりうれしかった。

私は戦後第1号のロックフェラー財団の援助で渡米した経験から、国際交流の必要性を常々痛感していた。そこで富山で日米医学会議を手始めに国際学術会議を開き、かつ本学に留学生会館の設置に奔走し完成させ、留学生が急速に増えたことは誠にうれしい。

光陰矢のごとし月日の経つのは早いもので、富山に来てから今年で24年になる。この間に医薬大（現富山大）の学長を2期6年、富山国際大学の学長を1期4年、伝染病研究所（現医科学研究所）から続けている毎日分刻みのスケジュールで仕事をこなし無事勤めてこられたのも、多くの皆さんがたの協力があってのことで感謝いたします。

現在、黒部川河口に近いクリニックの一室でユスリカの研究に没頭して早10年となる。今年卒寿を迎えたが、まだ研究に対する気力は衰えていない。これからもマイペースで努力していきたい。

「永遠の現在」としての杉谷の地

元副学長

本 田 昂

去る10月1日、いよいよ新たな富山大学が船出をした。顧みれば、富山医科薬科大学はちょうど30年前、東西医薬学の融合を理念に、医薬一体の総合大学を目指す特色ある教育研究機関として開学した。節目の年を迎え、また新たな出発にあたり、これまでの目覚ましい発展と充実の軌跡を辿ると、感慨ひとしおなるものを覚える。北陸自動車道から望まれる雄大にして美しく、そして荘厳ささえ醸し出される白亜の殿堂が、いつまでも人の生命と健康を守る「聖地」であってほしいと願うものである。

私自身、本学には医学部教授として、四半世紀以上にわたって奉職させてもらった。まだ開学準備室が神通川の辺りにあった頃に赴任し、爾来、平成14年に退官するまでである。その間、放射線生物、放射線基礎医学を担当し、併せて放射性同位元素（RI）実験施設の管理運営の責を担わせていただいた。研究の多くは次世代の方々に受け継がれ、さらに磨きのかかったものになっていることは誠に喜ばしく、彼らのますますの活躍を祈り、期待している。

しかし、過去と現在は、一体どのように線引きできるのだろうか。幼年時代に読んだ小説の一節は、時代的には紛れもなく過去の事象である。だが、それが脳裏に留まると、その者にとっては過去の延長線上にあり、依然として現在の出来事でもある。思うに、たとえ同じ事象でも、捉え方次第では、過去になったり現在になったりするのかもしれない。捉え方とは、事象が心に刻んだこだわりでもある。

何故このような問題を提起するのかといえば、富山医科薬科大学は、われわれにとって「永遠の現在」だと思えるからである。再編・統合によって新しい富山大学が誕生したため、現在の教職員各位や学生諸君、とりわけこれから赴任・入学される方々にとっては、富山医科薬科大学としての軌跡は単なる「過去」と映るかもしれない。だが、たとえ看板が掛け替えられても、われわれにとって杉谷の地にあるのは、富山大学の一部ではなく、いつまで経っても富山医科薬科大学にほかならない。

本学では、評議員や図書館長、副学長も務めさせてもらい、周囲の方々のご助力と支え

により、多少なりとも本学の管理運営に貢献できたのではないかと自負している。多くの先輩、同僚に恵まれたことも、私にとってのかけがえのない財産である。大学改革や独立行政法人化に向けた議論に、口角泡を飛ばした日々が懐かしく感じられ、今でも瞼を閉じると、あたかも昨日の事のように思い出される。初めての新生を迎えた日の出来事さえも、こうした節目の時には鮮明に蘇る。やはりわれわれにとって富山医科薬科大学は、まだまだ「永遠の現在」として心の中で生きているし、これからも生きていこう。

幸か不幸か、すでに退官・退職しているわれわれが、新大学を現実のものとして直視し、実感することは難しい。過去に対する思い出とこだわりが薄れることはあっても、現役の皆さんと同じように「現在」を見つめることはできない。われわれが杉谷の地に足を運べば、やはり回想の世界、過去の世界を散策し、現在の事のように語ってしまう。過去の現在化—悲しいかな、嬉しいかな、新しい大学になっても、それがわれわれ、少なくとも私の医薬大像である。

しかし、過去を現在として捉え、思い出に浸るのは、われわれだけで十分かもしれない。われわれの目指したものを参酌してもらえれば幸甚だが、新しい大学として、新たな目標に向かって大きく羽ばたいてほしい。19世紀のアメリカの詩人・ロングフェロー曰く、過去を顧みることなかれ、現在を頼め、さらに雄々しく未来を迎えよと。われわれは、これからは過去を現在の如く捉え、語り継ぐかもしれない。しかし、現役の皆さんには、現在を頼み、雄々しく未来を迎えていただきたいと願ってやまない。

富山医科薬科大学30周年に寄せて

元副学長

片 山 喬

富山医科薬科大学が、昭和50年に開学され30周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

私は、予定教官として、創設準備よりかわり、昭和54年泌尿器科講座に就任いたしました。当時、研究棟、附属病院は竣工まもなく、開設のための整備と教育、研究、診療の準備に明けくれる毎日でした。あれから30年、大学はすばらしい発展をとげ、感無量の思いがあります。私は、泌尿器科講座の主任、医学部長（4年）、副学長（医療担当）兼附属病院長（6年）と、21年間勤務させていただき、平成12年退官いたしました。その間、非常に多くの方々に、ご協力、ご支援をいただきました。関係各位に心から深く感謝申し上げますと存じます。また、多くの貴重な体験をさせていただき、思い出も多々ありますが、2、3述べたいと思います。

泌尿器科在任中に「富山県腎臓バンク」を創設することができたことは、大変嬉しいことでした。腎不全患者の腎移植を進めるため、第一外科、第二内科、小児科、泌尿器科の協力で腎移植チームを編成し、生体腎移植よりはじめ、献腎移植も実施するようになりました。献腎移植には、ドナーの提供が不可欠であり、平成元年「富山県腎臓バンク」を富山県及び関係機関のご協力により設立、事務局を泌尿器科教室内に設け、移植コーディネーターを県より配置させていただきました。私は平成12年より理事長として、その推進に努めております。

また、医学部長に就任したとき、推進すべきことの一つとして高等看護教育施設の本学への設置を考えました。医学教育、医学研究の進展には、附属病院の充実強化が非常に重要であり、そのためにも、また、時代の要請でもありました看護大学を本学に設置することは、緊急な課題と思いました。当時わが国では、新設医科大学以外の医系大学は、ほとんど看護短大を併設しており、看護大学は、東大と千葉大など数校でした。そのような状況の中で、本学への4年制看護学科の新設は、困難をきわめておりましたが、機会あるごとと文部省に設置を要望してまいりました。一方学内でも了承をとり検討に入りましたが、

養成施設を持たない本学では、強力に推進する部署もなく、山本教授、鏡森教授、看護部等といろいろ相談し、まず資料づくりをしました。平成3年3月看護学科設置委員会で「富山医科薬科大学における医療関連科学（特に看護学）教育、研究のあり方に関する報告書」をまとめ、看護学科設置趣意書とともに文部省に提出いたしました。その後設置意思確認があり、短期間の開設準備が必要となりました。同年11月より創設準備室長（併任）となり、当時の山崎学長、高久医学部長、佐々木病院長、押田事務局長、吉田総務部長等のご協力とご支援により、校舎新築等も含め多方面より本格的準備に入りました。

翌年、高間静子先生、神郡博先生に準備室に就任いただき、事務官の多大のご協力のもと精力的に開設準備をすすめました。将来大学院の新設も考えての看護教員の確保は、非常に大変でしたが、承認され、平成5年4月新設医科大学では初めて本学医学部に看護学科の設置を見ることができました。

私が病院長に推されたとき、患者様本位の医療と患者様のアメニティ増進を図ることが重要と考え、各部内で患者様サービスの充実、向上とチーム医療をすすめていただきました。さらに、病院の機能を改善し充実させるために、日本医療機能評価機能の評価を、病院各部に絶大な協力をいただいて受けました。厳しい審査の結果、平成11年、国立大学の附属病院では2番目に適性証の交付を受けることができました。それは、病院各部の改善への努力の結果であり、外部評価や助言により各部の一体感や各部間の連携が強化されてきて、非常に嬉しく思いました。

医薬大は、開学30周年の記念すべき年に、県内3国立大学が統合再編されて、新「富山大学」として発足しました。厳しい激動の時ですが、統合大学の中で特色ある医療人教育機関として、また、本県の最先端の医療機関として、ますますのご発展を心から祈念申し上げます。

和漢薬の研究会

元副学長

熊 谷 朗

『富山医科薬科大学開学三十周年記念誌』の随想執筆依頼であるので、小生が副学長兼病院長として勤務していた6年間（昭和57年～昭和62年）を思い出し、読者にも興味を持っていただけそうな中より話題を選べばよいと思っていたが、今さらというような事柄が多く、かつ退官後すぐ富山の地を去ったこともあり、よけいに話題にするような話は少ない事に気づいた。

そこで、ここでは本学とも関係の深い、和漢薬の研究会を中心に思いつくまま述べてみたい。

小生が初めて富山医科薬科大学の病院をおとずれた折、最初に目にとまったのは、病院中央の2階外来の最初の診療科の場所に、和漢診療科がおかれていた。普通は総合診療科がある場所である。これが開学にあたって、本学の特色を示そうとした意識がうかがわれた。

ここでは和漢薬の研究診療に関係深いところを話題にしたい。

これを私なりに整理してみると、和漢薬シンポジウムより和漢医薬学会への発展過程を説明すると最も解りやすい。

私がまだ阪大の第3内科に在籍していたころ、当時大浦彦吉先生が教授となり山村内科をおとずれ、私共に和漢薬の話をされた。私は甘草の有効成分のグリチルリチンの薬理の研究中であつたので興味深く話を聞かせてもらった。この時が富山で和漢薬シンポジウムを開催しようと話し合えた最初ではないかと思う。

その後大浦教授の努力により、年1回の和漢薬シンポジウムが立山の弥陀ヶ原の立山荘で開催にこぎつけた。開催地所も特異な場所であつたが、薬学のこの方面の研究者と臨床の漢方医が山の中で数日話し合えたのが、この方面の発展にきわめて重要な出会いとなつた。

しかしこの集団が、和漢薬シンポジウムとして10年かけてお互いを理解しようと努力し合えたのは、成功であつたと思っている。

10年間をかけてお互いの立場を理解した運営がなされた結果、興味を中心も多様化し、シンポジウムの運営が人数、内容共広くなる現況を見て、さらにしぼられた形で学術大会にしようという努力が、富山で行われて来た。

数年間討議の結果シンポジウムが、和漢医薬学会に発展されることになった。

昭和59年（1984）第1回の和漢医薬学会が発会のはこびとなった。

その後会報誌が学会誌となり、現在の和漢医薬学会誌として年間数回雑誌として出版されている。

その後私は学会の現役を引退したので、くわしくは不明であるが、雑誌と送られて来る学会誌名はJ. Traditional Medicines で今年で22巻に達している。表紙は英文であるが、内容は変更されていない。

今年の第22回和漢医薬学会は、東京で開催され、北里研究所の山田陽城氏が会長、大会のテーマは「基礎臨床の融合—全身修復へのサイエンス」となっている。

以上和漢薬シンポジウムの発足以来現在にいたる私なりの経過を書いて随想にかえた。

Festina lente (make haste slowly)

名誉教授
高 屋 憲 一

世紀を越え、元号も昭和から平成へと、多くの変化を迎えてきた富山医科薬科大学ですが、いよいよ建学30周年という大きな節目となりましたこと、お祝い申し上げます。

28年前、赴任して参りましたときは、キャンパス内のいたるところで工事が進められており、掘り返された山土と新築の白亜の校舎の対照的な姿に、新しい大学が誕生するさなかの、力強い活気を感じておりました。

一方で、30年の月日を経て、竹林と雑木林の丘陵は、現在のような非常に充実したモダンなキャンパスへと、劇的な変貌を遂げております。時間だけが成し得る、穏やかな、しかし、確実な歩みが、現在の富山医科薬科大学を造り上げた大きな力であったことも、30年という年月が形を成して、はじめて実感できるものだと、あらためて感慨を深くしております。

在職した月日もまた、教育と研究を、緩やかに、しかし確実な歩みで進めた26年間でした。専門である解剖学の講義と実験、実習の準備のための資料や、標本の作製など、特に開学当初は設備も十分とはいええず、非常に工夫を重ねたものでした。次第に実験設備も整い、実習用の標本なども揃ってゆくなかで、講義や実習の内容も深めることができてゆく過程は、得難い経験であったと思われまます。

研究の分野では、細胞内の微細構造の分析を続けて参りました。この分野では先進的であった新鮮凍結超薄切片の電子顕微鏡による観察の研究のため、アメリカ合衆国ノースキャロライナ大学チャペルヒル校のベネット博士の門を叩きましたのは、34年前のことです。以後、分析機器は透過型電子顕微鏡、走査型電子顕微鏡とX線微小分析を経て、イオン顕微鏡へと変化しましたが、細胞内の微細構造と細胞内の微量元素の働きを解明することを目的として、研究を続けて参りました。今日でこそ、微量元素の働きが少しずつ解明され、疾病との関連も指摘され、医学生物学的にも重要なテーマであることが一般にも理解されて参りましたが、細胞内での微量元素の働きに早い段階で着目し、研究を続けておりました。

このような分析を進めるにあたり、物理学や化学の分野で物質分析の最先端機器として開発されていた、イオン顕微鏡に着目いたしました。イオン顕微鏡とは、物質に特定の種類のイオンをビームとして照射することで、物質内の元素と分子をイオンとして放出させ、物質を構成する元素や分子を特定することができる装置です。

富山医科薬科大学解剖学教室へのイオン顕微鏡の導入は、1995年のことであり、医学生物学分野への応用は、国内では最も早い時期の挑戦でした。生物試料の分析に関しては、国内での事例は乏しく、イオン顕微鏡の操作の習熟することから始める必要がありました。幸い、スタッフに恵まれ、短期間の間に多くの成果を挙げることができました。電子顕微鏡で確立されていた新鮮凍結超薄切片を用いることで、生体内の細胞の微量元素と分子の分布を画像として表示させることができるようになりました。

将来的には、微量元素と分子の細胞内での化学的な働きが、生命活動に影響を与えている様子を画像として視覚的に示すことで、実態を解明できるのではないかと、大きな期待を寄せることができるものと考えております。

イオン顕微鏡の導入は、医学生物学分野での非常に新しい挑戦でしたが、その成果は、築き上げてきた過去の研究の上にあったといえます。

富山医科薬科大学が築き上げてきた30年は、新しい富山大学のスタートの基礎となるものであります。これまで、スタッフや卒業生が積み上げてきた実績は、流れ去ってゆく過去の歴史ではなく、未来のために用意された肥沃な土壌であるといえます。30年の糧の上に、さらに豊かな花を咲かせようと挑戦する、記念すべき時に立ち会えましたことに、心から感謝を述べたいと思います。

水銀、カドミウムそして石綿

名誉教授

加 須 屋 実

退官の翌日から、富山産業保健推進センターというところで働いている。独立行政法人労働者健康福祉機構は、全国各地に労災病院等を配置しているが、同時に各県に産業保健推進センターを設置し、労働者の健康の保持増進を目指している。ここ数年来の重点課題は、急増する自殺者（平成10年から3万人を超え、そのうち労働者は8～9000人）や増加する過労死対策として過重労働とメンタルヘルス対策が最重要課題となっている。そのようなときに、突如として石綿問題が発生した。平成17年6月下旬のことである。そのような状況なので、原稿依頼を受けたとき、まず石綿を思い出したのだった。

昭和53年4月、富山医科薬科大学に着任し、さっそく呉羽丘陵にある大学に出かけ、公衆衛生学講座のある9階にたどり着いたのだが、まだあちこち工事中であった。そしてそこで見たものは、驚くことに、「石綿」と明記した断熱材の山だった。実は当時「環境毒性学」（日刊工業出版社、昭和52年）を出版し、「ところで、なぜ日本では石綿による環境汚染にもっと注意がむけられないのだろうか。やはり、この人が石綿で中皮腫になった人だ、という人が出現しないからだろうか。その生体影響がだれの目にも明らかになってからでは、とりかえしがつかないのに」と書いたばかりだったので、心底驚いたのである。水俣病、イタイイタイ病などに続いて、職域を超えた人体被害をもたらす可能性の高い物質として大きな危惧を抱いていたのだった。この建物が将来解体されることがあるかどうか分からないが、そのときは平成17年7月1日に施行された石綿障害予防規則をしっかりと遵守して頂きたいものである。

環境汚染病の予防を研究目的とし、人体被害が発生する前に毒性の評価をする方法として組織培養を利用しようと試みていた。生まれて1週間ほどのラット小脳の切片をさまざまな環境汚染物質を加えて培養し、毒性を評価する方法を開発しようとしたのである。まず、個体レベルで毒性がよく研究されている水銀化合物を用いて毒性を比較検討することとしたので、神経組織を使用した。この研究で学位を取得し、ついでカドミウムを含むさまざまな化学物質の影響を検索しながら富山医科薬科大学に赴任した。組織培養法による

毒性予測の研究を続ける目算だったが、故萩野昇先生にお会いしてイタイイタイ病（イ病）の研究に着手することを決意することになった。イ病の研究はすでに完了していると思って富山にやってきたのだったが、萩野先生のお話でまだまだやるべきことが残っていることに気付いたからである。なお、環境問題については重要課題が多々あり、社会的要請が多様であることから、研究室としてはスギ花粉症のアレルギーに関する研究、大気汚染の樹木年輪情報の利用などについても手がけることになった。以来、イ病研究に携わって24年ほどで定年退職となったが、その研究は独立行政法人環境再生保全機構による「重金属等の健康影響に関する総合研究」の班員として現在も続けられている。

自然環境と人体内に残された有害化学物質の爪痕は深く、その影響の広がりに行き着く先は定かには見えない。科学・技術に関する研究は多岐にわたっており、すべての分野における格段の進歩が望まれていると思うが、中でも地球と生命体の命運に直接関わる環境医学・科学の責任は重い。私の研究生生活の動機づけは人体被害を前提としない真の予防対策を確立することにあっただが、研究生生活の初期に危惧した、水俣、イ病、ヒ素中毒、大気汚染による呼吸器障害に続くものとして最大の可能性を持つものとして指摘した石綿によって、労働者のみならず一般住民が被害を受けているありさまを、古希を迎えて目前にすると想像もしなかった。新生富山大学については、環境問題を含めて100年以上の先を見通した教育、研究を追求して頂けるものと信じている。

雑種、そして雑草のごとく

名誉教授

伊 藤 祐 輔

1975年（昭50）6月、久世照五君（35歳）を新潟駅頭で迎えた。私は40歳であった。その年の10月に開学する富山医科薬科大学医学部麻酔科学の教授・助教授の予定者となったからである。しかし、お互いに顔は知らないのであったが、改札口でそれらしい人としてすぐに分かった。新潟市内古町の割烹で食事をしながら話しているうちに、お互いどうも初対面ではなさそうな気がしてきた。金沢大学と新潟大学なのでクラブ活動で関係があったことが分かった。久世君は1964年（昭39）6月14日新潟地震の前々日第8回金沢大学・新潟大学医学部合唱合同演奏会にOBとして新潟に来てくれた。演奏会場の新潟市公会堂前での記念写真に二人とも最前列にうつっている。そんなことで初めから大いに意気投合した。教授・助教授の人選にあたられた金沢大学放射線医学平松博教授（富山医薬大初代学長）は金大洋楽部の顧問をしておられた。平松教授が私たちのことを知っておられた筈はないが、全く運命と言わざるを得まい。

1976年1月各講座の教授・助教授予定者の初会合があり、研究棟・病棟の各々の位置について話し合われた。生憎私がインフルエンザで倒れ出席できなくなり、久世君ひとりを出してもらった。麻酔科の研究棟は4階になった、など電話連絡してくれた。このときの寒気は厳しく、小林副学長・藤巻先生ら新潟勢の乗った特急北越が夜間雪の中に立ち往生し、ビュッフェの酒を飲み尽くしてしまったとのことである。

それから3年間の準備をして、1979年（昭54）4月に伊藤、久世、佐藤祐次（助手）が発令になった。麻酔科学講座の開講である。この4月は寒く、暖房のない研究室でこの3人は備品や消耗品の伝票を切りながら、少しずつ住めるように、そして研究ができるようにしていった。佐藤君が暗算が得意で、たいていの計算は暗算でやってしまうので、久世君が大いに驚いていた。久世君はこつこつと乳酸リングル液代謝の実験装置を整えていった。

5月には検査技師山本昌子、秘書高柳暢子の女性群が加わり、華やかとなった。久世君は山本さんを相手に実験が本格的となった。彼はこの研究が実って1992年に金沢大学医学

部教授となるのである。

10月の附属病院開院を前に、8月25、26日氷見の民宿に皆が集まり、医薬大麻酔科結成の盃を挙げた。伊藤、久世、中西拓郎、樋口明子、増田明、田辺隆一、海木玄郷、山本、高柳のメンバーであったが、田辺君は立山診療で参加できなかった。海に舟をだしてキス釣りを楽しんだ。釣れるは、釣れるはの大漁であった。

手術部助教授には、1980年4月に宮崎久義君（現国立熊本病院長）が熊本大学から赴任してくれた。これに関連して牛島一男君（現熊本大医学部附属病院手術部助教授）が熊本大より加わり、さらに金沢大卒の矢作直樹（現東京大学医学部救急医学教授）、八木裕一郎が新人として入局した。山形大から里村敬が転入し、その縁で冨田博が加わった。本学1回生から山崎光章（現富山医薬大麻酔科学教授）、杉森隆、2回生から渋谷昌子（桐山）、筑波大から林睦子（成瀬）、本学3回生から広田弘毅、渋谷伸子と医薬大麻酔科ファミリーは増えていった。

宮崎助教授は1982年10月に国立熊本病院に転出し、その後任に青森労災病院から佐藤根敏彦君が翌1983年2月に着任してくれた。彼は佐々木均君を連れてきた。関連病院も富山県立中央病院、富山市民病院、済生会富山病院、黒部市民病院と着実に増えていった。金沢、新潟、熊本、弘前の血が入って流れていった。雑種だから強い、そして個性豊かな若い医師たちが和をもって、まさに雑草のごとく伸び伸びと生きていた。

開学から初めの10年を麻醉科を中心に振り返ってみた。

開学30周年記念に寄せて

名誉教授

小 泉 富 美 朝

平成17年10月は富山医科薬科大学開学30周年を迎えると共に新しい富山大学に統合されてのスタートとなるべき記念すべきときで、30年間に築き上げた伝統を継承しつつ、ますますの発展を祈念するものである。

私が富山医科薬科大学に赴任した昭和52年4月には、医学部は講義実習棟が完成し、研究棟は内装中、病院棟は建設途上にあった。病理学2仮研究室は完成して間もないコンクリートの匂いが残る講義実習棟2階の生化学実習準備室であった。ここで1年間過ごし、翌年の4月に研究棟2階の病理学2教室に移った。この2階廊下は病院棟への連絡通路であり、この通路にはグリーンのカーペットが敷かれてあり、いつも研究室のドアを開けると一直線に伸びたグリーンベルトが見渡され印象深く思い出される。この研究室で22年間、病理学2講座を主宰し、教育、研究、病理診療に従事し、大過なく無事歩んで来られたのは学内・外の関係各位の温かいご指導とご支援によるものであり、深く感謝している。この22年間に積んだ研究業績と業務実績などは、私の退官時に「教室の歩み—初代教授退任を記念して—」として小冊子にまとめて刊行し、お世話になった学内・外の関係各位に贈呈させて頂いた。22年間に甦ってくる思い出は沢山あるが、特に教育関係で忘れ難い思い出が二つあり、ここに簡潔に記したい。

その一つは、学生委員の時で昭和55年度の大学祭に学生からロックコンサートを開きたいとの要望があり、委員会では従来認めていなかったが今後のこともあり、この機会にどの程度の騒音が出るのか調査した後に結論を出すことになった。学生にロック演奏を実演させ、騒音計を使って古沢地区、学内では研究棟と病院棟の7階の音量測定を行った。その結果、付近住民にはパンフレットなどを配布して了承を得ること、苦情が出れば中止、なるべく音量を下げる、時間を厳守、屋内で開く時は窓を閉めて暗幕を張るなどの条件を付して許可した。大学祭終了後、付近住民から苦情は出なかったことが報告された。もう一つは平成5年、医学教育検討委員会委員長のときのことである。当時は全国的に各大学独自の個性ある教育改革が唱えられ、本学でも教育の大綱化と平成9年度より新教育課程

の学生入学に対応したカリキュラム編成を検討する時期であった。このカリキュラム編成の検討に医学科学生代表をオブザーバー参加させる提案を行い、委員会です承されて教授会に報告したところ、全く反対なく了承されたのに若干の戸惑いを感じたのである。カリキュラムの編成に学生の参加は委員会では初めての試みで画期的なことであったし、後日学生代表の一人は学生と教官の双方がよりよいカリキュラムを作りたいという姿勢の表われで高く評価できると感想を述べていたのが懐かしく思い出される。

11年4月から老人保健施設シルバーケア栗山に施設長（嘱託医）として勤務している。勤務して6年余りになるが、医療に関して医薬大卒業生諸君にお世話になっているのでお礼を兼ねて本学の医学部同窓会報第14号に「老人保健施設に勤めて5年」の感想文を掲載させていただいた。また平成15年度より本学医学科で、「免疫アレルギー疾患」の講義で「膠原病の病理」について年1回の講義を担当して3年になる。教科主任、村口篤、杉山英二両先生の要請によるもので、免疫学的治療の進歩により現在の膠原病では典型的病理像は装飾されてわかりにくくなっているのが、1960—1970年代の典型像について講義してほしいとの要望に応じたものである。講義終了時には、出席学生の評価によるアンケートが取られ、後日このアンケートの集計結果が各教官に連絡されてくる。出席率もよく、また学生の要望もあり参考になるが、教官側は大変厳しく時代の流れを痛切に感じている。

開学30周年に寄せて

名誉教授

北 川 正 信

「各県一医大」という“角栄構想”は戦後の駅弁大学を連想させて自分の抱いていた大学像にそぐわず、文部省の信念の無さをなじる思いがしたものである。それまでの大学が与える研究者層・教育者層の重厚な印象とは程遠い、浅薄な教員構成と質の落ちる学生の増加が懸念されたからである。それが、自らその波に巻き込まれてみると、その懸念は当たっていたとはいえ、地方の医療水準を量・質ともに上げようという所期の目的を達成するには賢明な選択であり、さすがは角栄、というように評価が変わった。地方に良い医師を迎えようとしても、病院を増やすだけでは人材が集まらず、大学教員という餌を用意するのが早道と、勘の鋭いかの俗人宰相は考えたのであろう。おまけにその主要人事を巡って群がる俗人教授からの献金がわが自民党を潤すという計算があったことも間違いない(当時の「週刊新潮」誌にそうした記事が載っていた)。

わが富山医科薬科大学も御多分に漏れずこのような産湯を浴びて誕生したことは初代教授ならずともほろ苦く思い出されるころであろう。それはともかく、若い教授たちを牽引車としてこの30年間新設医系大学の中ではよく健闘した部類に入るのではないかと思っている。大学を“就職先”と口走って私に叱られた教員も居たが、そのような就職意識というものは己の生活第一という響きをもち、それでは若い大学が成長しないとみたからであった。設立の理念の一つであった“東西医学の融合”というのを取ってみても、充分形を成したとは思われない。大学病院も研修医を引き付ける魅力に欠けている。名実共に一流の大学と言われるにはまだまだ尽力が必要である。その尽力の要点は“わが身第一ではなく、公のために”でなければならない。学生もその参加要員であることは言うまでもない。大学の名称が変わっても、これまでに築かれた基盤の上に立って、より充実した医療部門に育ててもらいたいものである。

わが医科大30年日の転機に寄せて

名誉教授
辻 陽 雄

いよいよ富山医薬大は富山大学として再出発する。医薬大開学と病院の開設などシステムの検討や立ち上げ作業に明け暮れた日々を思うと、“手塩にかけた医薬大”という想いと愛着、今ではいとおしささえ覚えるのは私だけではないであろう。その折々の労苦はいまは清々しい思い出でもある。

この足掛け30年という割合短い期間に医薬大は一貫して医と薬、東西両医学の融合という独特の理念のうえに発展を遂げ、いくつかの特質を備えた確かな存在となったことに、誇りと喜びを感じている。しかし予想を超える早さで世情は動きその行方の不安定さ、超高齢少子にみる人びとの価値観や要求の複雑さなどを思うと、医系教育機関としては、世の流れを予見しつつ、遅れをとらぬ速やかさでの確かな備えができるよう小回りのきく体質が要求されると思われる。漫然とした論議のくり返しは、どの大学にも共通する好ましからざる性癖だが、それは見えざる莫大な時間と意欲の損耗を招きかねないような気がしてならない。

私は20年間の杉谷の生活から離れて久しいが、見事に立ち上がった大学の威容に国の力の大きさを知ったのだが、やがて国立大学は平均主義的横並びの思想に貫かれているという淋しさを覚えた記憶がある。その数年後、遠山敦子氏（当時文部官僚のち文科相）は国立大学の発展にとって横並びの慣例は弊害を招くとの記事をのせ、私は文部行政に些かの光をみた思いもした。COE、拠点大学化、独立法人化、諸評定化などなど、大学は世の巷と隔絶されたオアシス社会から競争社会へと移りつつある。

私は赴任間もなく図書館長を拝命し、大学の中心は図書館に在り、などと鋭意整備に当たった日々も懐かしい。そんな関係から初代の平松学長とはたびたび相談の機会があった。ある日、つぎのような夢ともいえる話を申したことがある。これからの医師は坐して患者を待つのではなく、自ら行動できる積極性のある臨床の行動教育が必要となる。予期せぬ広域災害や救急に手を拱くことのないよう、危急臨床システムを他大学に魁けて立ち上げられれば素晴らしい。そのためには、ヘリポートを兼ねた立体駐車場を建て、地下道で病

院と結ぶ。同時に学生待機用の宿舎も設け、県と交渉してヘリコプターを常駐させるのが理想だというものであった。平松学長はこの突飛な考えにも笑顔で頷かれたのだが、創設完了とともに退官され間もなく他界されてしまった。

昭和56年は聞きしに勝る豪雪。県も大学も予想もしない莫大な除雪費と労力を費やしたという。私の頭から消えなかった立体駐車場の建設費とこの除雪費を調査検討したところ、前者は約10年で減価償却ができるとの結論となった。その後、構内駐車場の不足が問題となったので、私はひそかに立体化の考えを事務局に打診した。答えは他大学に類例がなければ、富山の気候を加味しても、本省から一喝食らうだけだという。まことに横並び行政は現場にまで浸透して萎えを感じた次第であった。

平成17年10月1日、新「富山大」はスタートした。この日、北日本新聞には8頁にもわたる誕生特集が掲載されている。新大学は医薬理工総合大学院の発展的開設を前提として8学部1研究所の総合大学である。この特集記事は飛躍の夢をもたせてくれる。特集の標題は「知の力結集」とある。異論はないが、大学では研究と成果の還元という使命は当然だが、何といても次の世代を担うべき人材の育成という使命が第一であって、それは知力だけでは果たせない。私は「知」に加えて「愛」が不可欠だといまも思っている。つまり愛（philos）と知（sophia）こそ大学の大学たる普遍の本質だということである。医学教育では、人間学、生命哲学、生命倫理を主とするリベラルアーツの強化も新大学に期待したい。医薬大30年の歴史の転換期にあたり、尽きせぬ愛と感謝をこめて、所感の一端を述べさせていただいた。

双六診療所の現状を憂う

名誉教授
堀 越 勇

医薬大の診療所が双六小屋に開設されたのは、開学からまもなくの頃でした。以来四半世紀。開設当時、必要な薬剤の供給に協力したこともあり、私も小屋を拠点に、槍が岳、双六岳、三俣蓮華岳、鷲羽岳、黒部五郎岳等を散策して来ました。散策には常に山岳部学生が同行しており、時にはカメラ一つで槍に向かう筆者に、すれ違う登山者から奇異な目で見られたこともありました。当時、登山者の多くは若者で、大きなキスリングに寝袋や大鍋を括り付けている学生もおり、あえぎあえぎ登ってくるその姿は未だに忘れられません。

ところがここ10年、夏山に来る若者の集団が徐々に減り、代わって中高年の登山者が増えてきました。特に、ここ数年の激増ぶりは、目を見張るものがあります。グループの人数も年々増加し、30人を超す集団も珍しくありません。集団は北は北海道から南は沖縄まで全国から来られていることが分かりました。中高年の登山が活発なことは平均寿命が世界一の現在、喜ばしいことです。

ここで山の診療所についてお話ししましょう。開設時、小屋の一角をお借りして診療を行ってきました。時には遭難者の救出にも協力し、感謝状を頂いたこともあります。一つ困ったことは、宿泊している登山者と医療者や学生の生活リズムが異なることでした。朝の早い登山者にとっては、夕食後に続く団欒は誠に迷惑です。度々の苦情に、小屋のオーナーとも相談し、小屋とは別棟の診療所を建設することになりました。国立公園内に建物を建てることには行政の許可が要り、簡単ではありません。何とかその筋の友人の協力を得て建設の運びとなり、建設資金の過半は小屋のオーナーに依存して、建坪16坪、8畳4間の独立した診療棟ができました。診療設備も充実し救急医療に耐える体制ができ、名前も富山医科薬科大学・双六診療所の看板を掲げています。とはいえ大学の付属機関ではありません。組織名は発起人の名をとって「雅会」とし、夏場の7月20日から8月21日までの1か月開設する季節限定診療です。以来10余年が過ぎました。

しかし最近新たな問題が持ち上がってきました。診療に欠かせない医師・看護師の不足

です。これは多くの山の診療所に共通した問題です。医師教育の徹底と、研修制度の充実が裏目に出て、診療所の維持管理が難しくなってきました。山の診療所活動はたとえ自由診療の看板を掲げても医療者に報酬を出せるほどの経済効果はありません。今年もお盆で一番患者の増えるときに医師の手配がつかず、小屋のオーナーを心配させてしまいました。今回は何とか手配できましたが、中高年登山者の益々増える傾向を考えると、行政当局と大学管理者の特別の配慮を切に願うものです。これまで、「診療所を大学の付属機関に」せよとか、大学は山の「診療所活動を研修医のカリキュラムに」組み込めとか、「ボランティアを広く募集」してはというような提案を行ってきましたが、実現には至っていません。この事実を理解して頂きたいものです。

回 想

名誉教授

吉 井 英 一

明治26年（1893年）富山における薬業振興を期して設置された共立富山薬学校を発祥とする富山大学薬学部が、昭和50年（1975年）10月1日に開学された富山医科薬科大学の創設に参加、薬学部教授の一員として1996年3月に定年退職するまでの20年間、恵まれた自然環境と施設のもとで教育・研究に没頭し得たこと、大変に幸運であったと思っています。

杉谷キャンパスでは、真っ先に講義実習棟が竣工（昭和51年度）、52年度には医学部研究棟が完成、翌53年度（昭和54年2～3月）には、医科薬科大学附属病院、事務局管理棟、附属図書館、さらに薬学部研究棟・共同利用棟、薬学部植物園・管理棟が竣工。翌54年度には和漢薬研究所が薬学部研究棟西面に接続して完成、富山大学五福キャンパスからの移転を完了した。なお、富山大学薬学部の講座研究室の富山医薬大への年次移行は、51年度3講座開設／52年度4講座増設／53年度5講座移行／54年度5講座移行なる手続きによって実施された。さらに、53年度6月には大講座制をとり大学院薬学研究科・薬科学科（博士課程5講座）に再編された：薬剤薬理学、医薬品化学、衛生・生物化学、薬用資源学、物理薬剤学。

遡る51年4月、富山医科薬科大学・山崎高應副学長が薬学部長事務取扱に就任（～53.7.31）、ついで増田克忠教授が薬学部長を2期務めた（53.8.1～57.7.31）。その間に、薬学研究棟に隣接して「共同利用研究施設」が発足、5年後に「実験実習機器センター」と名称を変更し省令施設に昇格（59.4.11）、吉井英一教授が初代センター長を務めた（59.8.16～1.7.31）。なお、この人事に前後して山崎高應教授は薬学部長を2期務められており（57.8.1～60.11.30）、3代目の西荒介教授へと継がれた（60.12.1～62.11.30）。

昭和62年12月1日に吉井教授が西教授から薬学部長を引き継ぎ、平成3年11月30日までの2期4年間その任に在ったが、その間に山崎高應教授（初代副学長・50.10.1～54.6.30）の3代目学長就任があった（昭和63.4.1～平成6.3.31）。また、昭和63年初期頃から、学部内および同窓会会長・田村四郎氏をはじめとする薬窓会関係者の間で「薬学部

創立百周年記念式典および記念事業の実施」が諮られてきた。1990年3月に創立百周年記念事業後援会が設立され（田村四郎・後援会会長）、記念事業実行委員長に薬学部長・吉井英一が就任した。

記念事業計画としては(1)薬学教育・研究助成基金の設置、(2)百周年記念石碑の建立・環境整備、(3)創立百周年記念史の発刊が盛られ、平成2年3月20日には記念事業後援会会則に従って役員等が定められた。また、資金募集の実施方法と運用、寄付金の免税措置等の取り扱いは総務部主計課・市川勇総務係長に委任、文部省および国税局の指導を得て減税措置が認められた（平成2.5.1～4.3.31）。基金募集にあたって、田村四郎後援会会長は主に富山県内の関連企業や薬窓会会員・役員を対象に、実行委員長の吉井英一は東京医薬品工業協会および大阪医薬品協会をはじめ、県外の先輩や製薬および関連企業役員を訪ね支援をお願いした（収入の総額約1億6,500万円）。

記念式典及び関連行事は、創立百年目の平成4年11月7日、富山県民会館に於いて実施された（詳細は『富山医科薬科大学開学二十周年記念誌』第2章第2節）。午後の富山第一ホテルにおける記念祝賀会に次いで、杉谷キャンパス・薬学研究資料館前に設置された記念石碑「温故知新」（山崎学長の揮毫）の除幕式が、多数の富山薬専OBの参加を得て盛大に行われた。

その後、定年退官までの約4年間、教育研究（医薬品化学）に専念、1992年の日本薬学会学術賞受賞を契機に依頼のあった国内外からの招待講演、特に「スピロテロン酸抗生物質の化学と全合成」は、新鮮な合成方法論と実施手法において注目を浴びた。

30年前を想う

名誉教授

小 橋 恭 一

日本国内各県毎に国立医学部をという70年代の構想の下で、しかし富山では東大医学部に端を発した全国的な大学紛争のせいで、単科大学としての設立を余儀なくされた。医科大学設置にあたって、富山大学薬学部教授会は、大学院博士（今でいう後期）課程という「エサ」に移行するか否かかなりゆれていた。当時の教授方はほとんど亡くなっているので、早くそのいきさつを聞いてもらいたいものである。小生は当時助教授だったので、聞く所によれば、生物系は賛成、物理系は反対、化学系は学部長一任、富山大学評議会は反対だった。これまで大学院は修士課程だけだったので、教授会は博士後期課程新設を前提に移行賛成と決定、評議会は「好きな人ができたので嫁ぐならしょうがない」という発言で決定した由。それからの4年間、二つの大学のかげもち教官として、入試は県内の短大、高校を借り歩き、会議は県立病院の一室で、富山大学と医薬大の併行進行の4年間であった（現在の教職員にはとてもわからない）。

薬学部教授会の建築委員長が、故長谷純一教授であったので、助教授の小生がその手伝いをさせられた。杉谷の島や林を見て歩いて、こんな斜面の丘に大学を建てられるのかとあきれたり、連日施設課の職員から図面を見せられたりして、おかげでこの2年間は自分の原著論文数グラフの谷となってしまった。医学部の研究室の設計は担当教授がおられないまま進行したので、講座の特殊性はほとんど討議されていなかった。失敗は教授室が著しく狭く、薬学部の半分しかないこと、ドアをすべて外開きにしたこと、などなどである。現在、在職中の教授、研究者、学生になぜこんな設計にしたのかと叱られそうである。薬学部は各講座均一の面積とし、共通部分は各講座平均割で供出させたこと、研究室内の区分けは当時の主任教授の設計図によるものである。教授室の面積も、実験室の設計もすべて各講座主任まかせで、30年たった現在にあわなくなっている設計も多々ある。例えば、背の低い教官の設計した流し場は、今の背の高い研究者には腰が痛くなるとか、不平は山程あるに違いない。また機器の発達や冷暖房などは4半世紀で様変わりするからである。

薬学部の大学院後期（いわゆるドクターコース）の設置を願っての医薬大発足であった

が、進学者はほとんど生物—化学系の講座に偏り、また和漢薬研究所に多く、また外国人留学生が半数を占めるようになった。研究者養成を目的としながら、その責任は部分的にしか果たされていない。むしろ富山大学薬学部の大学医院修士課程（1963年スタート）出身の方が、全国各大学に教授約30人、外国を入れれば計40人余を生んでいる。医薬大出身の方が若いから当然でもあるが、本学出身の研究者が増えるかどうか心配である。20歳代学生の若さを、発見の面白さに共感させる感性をはぐくんでもらいたい。

小生は大学教官生活35年（30歳から65歳まで）、前半は富山大学、後半は富山医薬大薬学部にて在職していた。そのためか富山大学との統合を、古巣に戻ったと受けとめている。昨年8月末の医薬大サヨナラパーティー（30周年記念）の参加者の半数が富山大学薬学部出身者で、医薬大卒業生が少なく、心情的に受け止め方の差を感じた。70年代初期の大学紛争の傷が癒えたという歴史的感想を持ってほしいものである。

※現職 (財)富山県新世紀産業機構
とやま医療バイオクラスター
科学技術コーディネータ

医薬大の功罪—壊滅こそ再生の糸口—

名誉教授

木 村 正 康

生み、育てた医薬大が国政の大学改革で壊滅して、遂に他大学と統合し元の古巣に戻る羽目になった。医薬大というわが国の類ない構想をもつ大学の創設のため、5人の創設委員に選ばれ、研究活動を中断してまで情熱を傾注した者には、誠に慙愧に堪えない。思い直して、医薬大の功罪を振り返ってみると、壊滅はこの30年間で1クールとした良い区切りかも知れない。想えば、旧富山大の評議会で薬学部代表として脱学部を宣言した昔、後足で砂をかけるようだと言われ、非難する他学部評議員を宥めるつもりで、医学部が一人前に完成した暁には一丸となって戻ることもあり得る、と返答したものの、まさかこんな形で実現するとは当の本人も知る由もなかった。

医学部構想は創設委員会結成以前から、私的検討会として、阪大山村教授（後学長）、東大織田教授（後病院長）、千葉大熊谷教授（後医薬大副学長）に和漢研大浦教授と私を含めた5人組の常連が会合を重ねた。すばらしい稀有な建学精神を持ってしても、具現化には第一ボタンから掛けはずれた。問題の火種は医学部内から上がった。金大側の初代学長と補佐する筈の新大側の副学長兼病院長との間に就任当時以来の確執があった。当然、医学部は金大派と新大派に真二つに分かれ敵対した。救いは、千葉大、阪大、東北大など他大学選出の第3勢力の存在で、どうにか運営された。こういう矢先、医学部教授の3人組が夜半に来宅し、医学部不和の元凶は薬学部のある有力教授が操っているの、彼をボイコットする改革に加担してくれという。彼への不平不満は一応否定しないで、本学の成立には政治的立て役者であった存在価値を論じた甲斐あって、不穏な成り行きは霧散できた。後年、首謀者の1人は有力教授を扶けて大学運営に尽力している。この件を時効として明らかにした今日まで極秘にしていたので、当の有力教授も知らぬが仏であったろう。

研究室を継いだ後任教授は人事が自由なら悩みは少なからうと考えるもの。しかし、医学部の新設の場合でも足枷があった。各大学推薦教授の数が決まっていて、不適者が出るとその選出大学から次選者が補充される手続では政治屋の選挙地盤に似て正直がっかりした。こういう理不尽は新設も既設でも差がなく付きまとうものだった。学長選挙の度に、

中傷や怪文書が舞い込むのは医系のお家芸なのか。薬系では考えられない新経験に当惑した。

薬学部にも問題があった。医薬大以前からの和漢研との長い確執が持ち込まれていた。確執のきっかけは教授個人間の軋轢であったので、若い人に代が移れば、自然消滅すると思っていたのは甘かった。確執の主人公が継承され、今や大学運営の欠陥というべき恥部となっている。私が主宰した研究施設時代は両部門も緊密性が取れ協動的であっただけに残念だ。

東大薬学部は医学部から独立した点、富山は逆行だと危ぶまれたので、殊更、医薬融合には気を配ったが、医薬連携は意外に順調で、薬学部の伝統と実績を医系人が評価し、敬意まで感じられた。研究面では医薬協力が確実に進行し大成功だった。創設期の私は一時期に16の委員活動で忙殺されたが、定年までの10年間は雑務一切に手を染めず、新設した折角の研究環境を最大限に利用しない手はないと、粉骨碎身して、研究に没頭できた。分子薬理から病態薬理へと展開させ、臨床薬理を後進に委ねることが成就できたのは、医薬両系の完全な融合の成果といえる。薬理研究の論文活動では全国機関のナンバー5に認められ、旧7帝大に肩を並べる目標をも達成した。

思い出尽きぬ場が壊滅する。医薬大にとって一大難事だ。旧日本海軍連合艦隊司令長官で存在を高めた山本五十六元帥の漢詩に、「降りかゝる雪で松柏は青さが冴える、降りかゝる難事で人は存在価値が高まる」、とある。まさに壊滅は医薬大の存在価値を高める好機と捉えよう。そして、この壊滅が再生への糸口となろうことを祈念してやまない。

富山医科薬科大学附属病院医療情報部 その生い立ち、成長、そして将来展望

名誉教授

山 本 恵 一

この度の『開学三十周年記念誌』が白木公康編集委員長によって企画編纂されるにあたり私ども所謂“創設メンバー（教員、事務官ほか）”が寄り合って、開学に先立つ医学部誘致運動が富山県庁、富山大学（当時）を中心に熱心に進められていた記録の多くを事務局の倉庫から引き出して閲覧する機会を得た。近日中にそれらの摘要を収録して、編集委員会のご企画に沿う協力をさせて戴きたいと冀っている。

そこで、茲ではそれら諸記録のうち、既刊の『十周年記念誌』『二十周年記念誌』に記載されなかった附属病院医療情報部の立ち上げから現在に至った開設時（学内措置）の経緯から中央診療施設への昇格措置、さらに関係者間で模索中の将来展望にも触れて、本学附属病院の飛躍的發展を希求される諸賢のご賛助を得たいと願っている。

前述の諸記録を通覧してまず感じたことは、文部省（当時）は当時の全国にあった25の国立医校のみならず、無医大県解消政策に拠る13の予定医校についても、附属病院事務局機能の能率化と事務局定員の削減とを見越した電算化構想を、昭和40年代後半より打ち出していたことへの驚きであった。昭和40年代といえ、当時私が本学教員候補のひとりに擬せられたことから、医大附属病院の将来像を勉強しておくことも必要か？などという殊勝気を起こして米国病院見学2週間のツアーに参加し、知名のメイヨー・クリニックを参観した際、彼の地でもまだテスト段階にあると説明されたが、病棟内各患者の臨床検査データがリアルタイムでナースセンターのモニター上に瞬時に出る（グラフ化して）のに驚嘆した。

帰国後本学任用が決まり、滞米時の印象が忘れられぬままに国内医校中にその様な模範がないかと探索したところ、九大病院の野瀬教授が先進しておられると聞いて教を乞うた。当時我が国では未だ邦字化された電算機がなく、九大では患者名をローマ字に直して入力するしかなかったとの草創期の苦労話も耳に残った。昭和54年10月、附属病院開院時の電算係はその使用範囲が医事業務に限られていたため、医事課に所属し、かつ予め本省

の指示?に拠る日立システムが供用されていた。当時の医療情報委員会（水越委員長）の主たる任務は、当時未だ新機軸とされた病歴の集中管理（各診療科共通カルテ）が中心で、診療業務全般から臨床研究までを包括する医療情報システム開発は、昭和57年8月二代院長熊谷朗先生の着任に拠って曙光を浴びることとなった。病院開設以来医療情報処理委員長を命ぜられていた私に対する院長指示は「本学附属病院診療科中、全国立医校に先んじて設置された和漢診療部の臨床・研究の機能向上に直結できる電算システムを構築せよ」であった。それを為し遂げるためには、和漢薬処方に対応できる薬剤部に対する和漢薬処方入力とともに世界最大のデータベースを保有する香港（中山大学）との交信が可能であるシステムの導入が不可欠とされることから、上掲の水越医療情報部長とも緊密な連繋のもとに、その中核となる人材の確保を、私の診療科（第1外科）の助手席1を転用する了解を得て、昭和61年阪大阿部裕教授（第1内科）の門下、林隆一博士を招聘した。同氏を招くにあたっては病院教授のポストを準備すべきであった訳であるが、その実現は本省の医療情報部措置が結実する平成7年まで待たねばならなかった。その後の医療情報部の躍進に関しては『二十周年記念誌』等に詳述されているので重複を避けたい。

私は平成6年に退官後、JICAの国際医療協力事業に参画した2年余を除いて、富山県庁の第3セクターである富山県健康増進センターでの健診業務に勤務しており、大学勤務時代とは全く違った視点から県下の地域保健、とくに検診施設と診療機関との連繋の緊密化の重要性に着目すべき日々を過ごして来た。現在の私が切実な願いとするところは、富山大学医学部がその創設時の意気と執念とをさらに発展させて、「富山県下の保健医療の中心となる」ことを文字どおり実現達成することである。それには県下の総ての予防医学、検診施設、診療機関とを一体化して有機的に稼働させることを可能ならしめる富山総合医療情報システムを構築することが必須であることは多言を要しないところであり、本学附属病院医療情報部の運営にかかわっておられる各位の益々のご研鑽を冀って已まぬ次第である。

富山市杉谷2630の思い出

名誉教授

窪 田 靖 夫

昭和52年春頃のこと、臨床系の教授予定者が杉谷キャンパスに集まり、科長（予定者）会議が当時の小林取病院長を議長として開かれた。当時まだ附属病院本体は工事中で骨格が出来たばかりであった。会議の場所は厚生棟、学生食堂の2階。小林病院長と事務官が正面に、そして約15人のスタッフがコの字型の席についた。

病院の概要の説明があり、外来各棟の配置について説明、協議が行われた。はじめは1階外来にまず泌尿器科があり、整形外科、眼科という案であったが、小林院長よりクレームがあり、「最初に泌尿器科はまずいよ」ということで順序が変わり、整形、眼科が入り口に、泌尿器科は奥にと変更された。今考えるととってもな話で、歩行の不自由な患者の多い整形外科、眼の不自由な患者の多い眼科を入りに置いたのは正解だったと思う。

会議が続いてそろそろ疲れた頃、清涼飲料水の自販機の場所の話になったところ私の隣の高久晃教授（脳外科、のちに医学部長、学長）が「そのへんのところは良きに計らえだ」と発言。事務局におまかせとなった。高久先生朝から酒の匂いが相当なものだ。「昨日何時まで飲んだの」と聞いたら「今さっきまで」ということだった。二日酔いならぬ酔っ払いだったためである。しかし、考えてみると末梢なことはおまかせで良いわけである。聞けば高久先生、仙台に居たときは仕事柄飲み過ぎることは出来ない由、脳外科という立場から無理もない。富山に来たときこそ、飲み明かす絶好の機会だったのだ（高久先生、公務を終わって、どうぞ今までの分までゆっくりお飲み下さい）。

科長会議は病院発足後は病院運営会議となり、病院長も熊谷朗先生、佐々木博先生、片山喬先生と引き継がれて行く。

病院運営会議で何回となく問題となったのは院内の喫煙の問題、絶対反対は篠山教授、国立大学の附属病院で喫煙など、とんでもないという強硬派、容認は愛煙家の小生と失火がこわいという看護部長、今はどうなっているであろうか。

その年の秋、福岡での臨床眼科学会のあと1泊の予定で五島列島の福江への旅行を決めていた。学会の最終日に連絡あり、明日午後杉谷の校舎で会議と、やむなく旅をあきらめ

て夜行で富山へ。会議は各講座の配置の話。3階の解剖、4階の生理などは決まっているものの臨床系は未定、会議の席上、上の階を希望するものは声に手を挙げたのが、放射線医学の柿下教授と私。放射線科が9階に、眼科が8階にと決まった。

五島列島福江の観光が駄目となった代わりに、15年間北アルプスの眺望が手に入ることになった。

今年の5月、眼科医会の会合で富山を訪ねた。駅前には立派なホテルや商店街が並び、かつての淋しい眺めは一変した。第一に、東京から富山には上越新幹線越後湯沢経由で3時間20分。空路は東京—富山間1日8往復。開学当時はYS—11機が往復、日に2便。その代わり晴天には北アルプスの山々を眼下に眺め、富山湾の美しい海岸線が展望出来た。

帰路は当時も同じ名前の寝台列車「北陸」、個室寝台は設備も良く熱い湯の出る洗面台と灰皿までついている。ところが肝心の煙草を買ってくるのを忘れた。

回 想

名誉教授

森 田 直 賢

—20年前、南米パラグアイ国薬草の化学・薬学的国際研究の思い出—

母学の創立30周年を記念し、何か思い出をとの依頼をいただき、私にとっては、パラグアイ国の薬草について国際共同研究を行ったことが最大の思い出であります。

日本政府とパラグアイ国との技術協力協定が昭和57年7月24日に結ばれて、農業や畜産そして医学などの研究協力が行われました。

たまたま、昭和59年、富山市出身のパラグアイ総領事であった杉田敏次氏が糖尿病だったのが、現地パラグアイの薬草を服用して癒ったことを、日本に帰省の折に富山市長に話をされ、パラグアイ東部チャコ地方に未知の薬草が多く、是非その開発利用のため、地元の富山医薬大、薬学部薬用資源講座と現地の国立アスンシオン大学、大学院化学研究科と国際協同研究をして、資源開発をしてはとの強い要望がありました。直ちに大学に依頼があり、学長の許可を得て、外務省や国際協力事業団へ申請、交渉し、受理されて、この研究プロジェクトが結成され国際研究がスタートしました。即、昭和60年5月から、パラグアイ薬草の化学・薬学的研究は3か年計画で実施にこぎつけました。この件でいかに進めるべきか何度も JICA と、そして学内での調整を進めました。この研究を行うに当たり…

(I) プロジェクトのリーダーとして森田が計画し相談し、先ず人選し、学部の薬用資源講座を母体とし、薬用植物園が助け、その内容を植物学部門（分類、採集、肥培、生産）、植物化学部門（薬草の有効成分の抽出、分割、成分の化学構造確定）、薬理学部門は現地大学にないので1年おくれで行うなどを骨子として、現地と交渉折衝し、人選は当大学13人、現地大学12人のスタッフでプロジェクトを作りました。

(II) 次に研究対象の薬草をいかに選定して行うかの問題でした。各種の疾病でも、現代習慣病を中心として考え、疾病に關与する酵素の阻害の強度のものを指標にして、現地で行っている多くの薬草エキスを、スクリーニングテストにかけて IC50 値の高いものを選んだ。即、糖尿病による白内障の Ar 阻害 (Aldose-Reductase 阻害)、高血圧に關係の A. C.E 阻害 (Angiotensin-Converting-Enzym 阻害)、肝臟解毒機能のグルクロニダーゼ阻害

(glucuronidase 阻害)、腎臓の尿路結石阻害のウレアーゼ阻害 (Urease 阻害)、高尿酸血症の改善のキサンチンオキシダーゼ阻害 (Xanthim-oxidase 阻害) などなどについて酵素検定で、100ug/ml で50%以上の阻害するものおよび70%以上阻害を指標にして、アスンシオンの各市場の薬草280種についてスクリーニング結果、薬60種の薬草を選定することが出来、2年目から抽出を始め、有効成分を分画分離して各種の新化合物を発見し、命名して、学会に報告しました。

(Ⅲ) 有用な薬草を採集し、2年目から3年目に向け、15,000㎡の薬草園を完成しました。併せて水生薬草の水池を作り、一定条件下で肥培管理システムを取り入れ、スプリンクラー数基をつけ、品度の高い薬草生産の基礎を作り上げました。

(Ⅳ) 薬理学部門は現地では設備もなく、準備のため1年おくれのスタートで、延長になりました。

(Ⅴ) 研究、指導で両国研究員は相互に研究技術交換のために滞在が1か月の人、3か月、半年、10か月の人と互いに訪問交流をしたことは極めて有意義な触れ合いでした。

(Ⅵ) このプロジェクトに対し日本国からアスンシオン大学に顕微鏡、ランドクルーザ1台、核磁気共鳴装置その他各種の機器など合わせて相当額が供与され、現地大学の学術、技術の向上に多大の貢献をいたしました。

(Ⅶ) 現地大学の今後の発展のため平屋建ての化学実験室、植物学研究室 (標本棚10基も)、薬理学実験室など計3棟を造成供与しました。

(Ⅷ) この研究は昭和60年5月に始まり、その成果は昭和61年から63年にわたり、どんどん研究員の努力研鑽が実りをあげ、学会での報告は25報に及び、パラグアイ薬草の化学・薬学的研究として世界に発信出来たことは研究員が一丸となって研究下さった成果であります。

(Ⅸ) この研究に関し外務省から宮内庁を通じて昭和62年2月27日、東宮侍従長から東宮御所へ出向のご沙汰があり、この研究について直に皇太子殿下にご下問^{じか}の榮に浴し、1時間20分にわたり、ご奏聞申し上げることが出来ましたこと、研究員を代表してリーダーとして光榮の至りでありました。

(Ⅹ) 平成3年4月に現地の薬草を調査し、研究員の努力の集積として、パラグアイ薬草写真集 (200種) を出版することが出来、天皇陛下に献上申し上げ、お慶びの言葉をいただきました。

(Ⅺ) パラグアイ国薬草の研究で昭和61年から63年にわたって、採集した薬草の乾燥の生

薬標本は、是非とも貴方の大学にしっかりと管理保存をと、強く天皇陛下から申され、恐懼申し上げ、大学の学術標本館の2階に設定した次第です。

〈むすび〉

この研究プロジェクトはパラグアイ国の多くの薬草の氷山の一角のみの研究でした。研究員は地球の反対側の環境のハンディをのり越えてすばらしい国際研究を成しとげて下さった。心から感謝と御礼を申し上げるとともに、両大学がさらに太い絆で結ばれ更なる発展を遂げられることを期待いたします。

この研究に最大のご支援を下さった外務省、国際協力事業団に対し深甚な感謝と御礼をこめて、20年も前のことになりましたが、忘れ得ぬ憶い出として記した次第であります。

富山医薬大耳鼻咽喉科学教室の開講当時を偲んで

名誉教授

水 越 鉄 理

富山医科薬科大学が開学して以来30年になり、記念事業が計画され、富山大学との統合も実施されるようになり、心より祝福している。今回、この機会に当たり、記念誌に耳鼻咽喉科学教室が開講された当時を偲んで、その実態を紹介したい。

富山医薬大の開学は昭和50年10月であったが、新規の医学部教授内定者の会合は昭和51年1月に行われた。その際、研究棟の部屋割り、附属病院の配置などが協議されて、私共の教室は研究棟5階、外来は2階、病棟は5階西棟で内科、眼科と合同と内定された。

その後、昭和51年4月に新入生を迎えているが、私は3月末より文部省在外研究員として、スウェーデンに出張し、主に医局長として、渡辺行雄講師（現在教授）が開講に向けて準備していた。したがって、建築その他協議に当たって、最終的判断のために、スウェーデンまで国際電話がかかり、予め手紙で来ていた項目に従って、最終判断を下したこともあり、懐かしい思い出として残っている。

その後、昭和52年1月、帰国後も開院に向かって会合がたびたびもたれ、富山へも出張、協議に参加した。また、耳鼻咽喉科の聴検室の建設も特別の配慮で専門店に発注され、平衡機能検査室も中検に設置され、コンピュータシステム（PDP11/34）の導入なども病院長小林収副学長のご支援により設置され、後の日本耳鼻咽喉科学会の宿題報告に役立てることができた。

昭和54年4月、耳鼻咽喉科学教室が開講し、前任地に新潟より、教授を始め大野吉昭助教授（現在新潟市開業）、渡辺行雄講師、大橋直樹助手（現在黒部市開業）が10月15日開院に向かって赴任している。この間、6月より新入生への講義も始まり、教室秘書深田由美さんを迎えている。また、武田精一技官は開講日より赴任しており、少人数であったが、家族的雰囲気、時にはすき焼や鍋物で会合をもったことも懐かしい。

翌昭和55年3月より地域医療機関との交流を促すために、集談会を月々開催するようになり、現在の緊密な関係を構築している。

思えば、教授以下教室員、技官、秘書を含めて、6人で発足し、全員当直の開講当時よ

り、教室の発展は目覚ましいものがあった。その後、他大学より新入局員3人、続いて、新卒入局員3人もあり、年々増員した。退官時までに、全国学会（第43回日本平衡神経科学会、研究会）、第89回日耳鼻総会（金沢の宿題報告の担当、さらに *Acta Otolaryngologica, Stockholm*）（Suppl. 504：1 - 157頁）の退官記念誌を発刊までするようになり、感無量の思いである。

このような教室の発展に当たっては恵まれた先輩、同僚、教室員、技官などとともに、地元の耳鼻科地方部会員など関係各位の絶大なるご支援と、比較的恵まれた研究費（文部省、厚生省、環境庁、宇宙開発事業団）などの賜物であり、心より感謝している。

30年間の足跡の重みを土台として 新大学での発展を祈る

名誉教授

矢 野 三 郎

1976年のはじめ、富山医科薬科大学創設の希望に燃えて、準備委員会出席のため雪の富山に幾度か通ったときのこと、その4月14日、大学の建物が何にもない街のなかで、富山駅近くのビルのホールを借用して挙行された第一回入学式のことなど、今、開学30周年という記念すべき年に、大学の名前から「医科薬科」という文字が消滅するという現実と直面し感慨ぶかく当時を思い起こしている。医学部と薬学部からなる大学を創設するという発想がどこから出たのか詳らかではないが、次から次へと新設医大が誕生していたとき、100年の古い伝統を持つ薬学部を既設の富山大学から切り離して、「医科薬科」大学を設立しようという計画は斬新なものであり、薬業界からも歓迎されていたように思う。しかし医学部と薬学部の複雑な関係を危惧してくださる方もあった。そのような立場にある人には、開学当初は薬学部附属医学部というぐらいの気持ちでやっていきたいと話していたが、それなら大丈夫と安心してくださっていた。

学生の講義は県立富山中部高校の旧校舎で開始されたが、臨床研究室には県立中央病院の敷地にあった総合衛生学院の一角が与えられ、1978年3月、現在の医学部研究棟が竣工するまでそこに留まった。1977年には講義実習棟や福利厚生棟も竣工し事務局も中部高校から杉谷に移った。大学の会議、委員会は事務局の移転に伴って所を変えていったが、医学部の第一回教授会は1976年4月28日、中部高校旧校舎で開催されている。なお、薬学部の第一回教授会は同年5月19日に開催されている。第一回大学評議会は両学部教授会での審議を経たうえ、同年9月10日に開催されている。大学運営の重要な要である教授会、評議会が設置されるに及んで教務委員会など、いくつか委員会も設置され、富山医科薬科大学創設の理念の大きな柱である「医薬一体」を目指し、大学の運営、教育、研究の全般にわたって、この理念を具体化するような計画が立てられていった。医薬合同講義、共同研究棟の建設などがスタートしたが、最大の目玉はなんといっても病院であったと思う。通常、病院は医学部の附属になるのが建前であるが、本学では大学全体の附属になったのである。病院の管理運営に関して、薬学部が大きく関与することになった。「医薬一体」の

スローガンをかかげることは容易であったが、医学部、薬学部ともそれぞれ過去の長い歴史を背負っているだけに、合同の委員会を数多く開いても、両者の溝を埋めるのは容易なことではなかった。「同じルツボの中で医も薬も苦労を共にすることによって、医薬一体のモデルをつくりあげたい」、赴任して一年たった1977年5月、あるエッセイに私はこのように書き記している。

単科の医科大学の人員配置しか認められなかったから、管理運営面では他の大学にみられない複雑な要因があった。学長のもとに二人の副学長がいるが、一人は医療担当の病院長、もう一人は教育、研究、学生補導担当ということになっている。前者は当然、医学部系になるので、両学部のバランスから、後者は薬学部系になるわけであるが、医学部の教育、研究の運営までマネージ出来る人材を見つけるのが一苦労であった。さらに複雑なことに医学部長も薬学部長も存在するのであるから、小さい大学なのに頭でっかちで動きがとりにくい。さらに一般の医学部と違って、病院長は副学長なので、医学部長より格が上になっている。

多少の波乱はあったけれども、ともかく10年も経つと、両学部ともそれぞれの持ち味を大切にしながら、相協力していくという形が整ってきた。30年経った現在、医学部には看護学科もでき、まさしくメディカルセンターとよばれるにふさわしい大学に成長してきている。大学の真価が問われるのはこれからである。医科薬科大学よりもスケールの大きな(新)富山大学という器に統合されることによって、この30年間の苦労が花開くことを願ってやまない。

随 想

名誉教授

庭 山 清 八 郎

小生が富山医科薬科大学医学部ウイルス学教室に赴任したのは昭和53年4月1日、呉羽丘陵の竹林が立山おろしでしきりと揺れ動く頃であった。その後12年間にわたり、歴代学長、副学長をはじめ、教職員の皆様の心温まるご支援、ご鞭撻と、学生諸君との深い交流の中で無事任を果たし、平成2年3月31日付で退官、後ろ髪をひかれる思いで故郷新潟に戻り現在に至っている。この度、開学30周年を迎えられ、誠に目出度く、心からお祝い申し上げます次第である。

小生の在任期間は12年と短かったが、最も充実した時期であり、いろいろな事が走馬灯のように過ぎる。原稿のご依頼をうけたものの、歳も傘寿を過ぎると記憶も薄れ、纏りもない内容となってしまったことを予めお詫びする次第である。

赴任直後の教授会で、いきなり剣道部部長を引きうけよと命ぜられ驚いた。このような経験はなく聊か戸惑いを感じ、固辞したものの引きうけさせられた。然し今にして思えば、人生における大きな試練で、学生剣友との深い交誼を通じて多くの教訓を得た事が思い出される。

○つぎに小林収副学長から本校も開学3年目になるが、学制、講義時間等について検討の余地があるので、医学教育検討委員長としてその任に当たってくれないかとのことで、これも辞したいところであったが、承諾させられた。幸いに、加須屋實、片山喬両教授の力強いご協力を戴き作業が進められた。その結果講義時間数が文部省指定のそれより遥かに超過していることが知られた。これは新設校に蝟集された新進気鋭の教授方の学問、教育に寄せられる情熱の結果であることは自明であるが、止むを得ず交渉に交渉を重ね所定の時間数に近づけ得たことは幸いであった。

○学制のこと、大学教育についてはユトリ教育を含めて屢討議が重ねられているところで、単位認定については在学年数の2倍以内で取得すれば卒業可能という時もあり、小生も経験したところである。本学ははじめ6年制、縦割楔型の教育を建前とされた。単位認定試験の判定は厳重となり1年毎とする傾向がみられたが、教養学科中に基礎医学が繰り下げ

られたりし、実習も絡み留年をさせることになることになると1年で済まず1年半戻さなければならぬことがわかり、急遽、教養、基礎、臨床をそれぞれ2年毎のチェックとすることで解決した。

○富山の雪は深い。本校は海拔100mの呉羽丘陵の頂上に建てられ、屋上から富山県の全域が俯瞰され、風光明媚を誉るが、豪雪となると交通不便となり、学生はおろか、講師の先生も登校不能となることも屢で、休講も止むを得ないこともあった。然し臨床実習だけは将来有為な医師としての自覚、責任をとらせることの重要性から休講を一切認めず、一部学生から憾まれるようなこともあったが、後日、新聞紙上で将来医師たるものはかくあるべきと称誉され、逆に欣ばれたこともあった。

○学术交流の目的で、北京中日友好医院から陳詔武院長、金恩源教授が来られ会議がもたれたことがあり、後に金恩源教授がウィルス学教室の客員研究員となられ、和漢薬の抗ウィルス効果について研究を共にした。和漢研に免疫機能制御部門が新設されるや初代教授として迎えられ、後に陳院長と一緒に本学名誉博士の称号が授与された。小生が第2の人生として就任した新潟リハビリテーション専門学校との学術提携に役立ち、さらに'96 International Symposium on Acupuncture, Traditional Meditin in China の副主席として招聘され面目を博した。現在第3の人生として西蒲中央病院で医師として療養介護の仕事に当たっている。「日既に暮れて、猶烟霞絢爛たり、歳将に晩れなんとして、更に橙橘芳馨たり、故に末路晩年は、君子更に宜しく精神百倍すべし」なる諺を心にとどめ自戒しているこの頃である。